

モロッコ珍百景

モロッコには異邦人が見ると「これは何だ?」と思わせるものがある。オヤ?と感じたものを思い出しながらいくつか取り上げてみたい。

「アルガンの木」

まず真っ先に浮かぶのは、この広い地球上に唯一モロッコにだけにしか生育しないものがある。それはアルガンの木である。

不思議なことに実のなるアルガンの木は、モロッコでもごく限られた場所にしか生育せず、これまで世界各地で移植を試みているが未だ成功した事例は皆無なのである。

アルガンの実からとれるアルガンオイルは美容と食品に利用されているが高価である。

生育地のタルーダントでアルガンオイルの小規模工場を見学した。生産現場で購入すると小瓶で800円見当だが、日本では同じ小瓶が4千円時には6千円を超える価格となる。美容とは金のかかるものだ。

厄介なことにアルガンオイルは他の油とよく混ざり合う性質を持っている。混ぜ物は何れも色・香り・価格・酸化しにくいなどの理由で選ばれているようだ。オリーブ油・大豆油・コーン油などとよく混合されていると聞く。いずれも見た目には混ぜ物だとは判然としない。

化粧品は“アルガンオイル配合”と表記してあれば違法とはならないが、中には5%のアルガンオイルに95%の混ぜ物がある場合もあるそうだ。純度の高いものを求めるなら信用のおけるところで求めねばならない。

アルガンオイルは女性に大人気である。一度使ってみた人は以後大ファンとなる。きっと大層優れた化粧品なのであろう。

生成したてのオイルを舐めてみると、苦みを感じるがローストすると苦みが消え、サラダオイルとしてまたパンやクラッカーなどと一緒に味わってみると抜群にうまい。

「ローズウォーター」

モロッコの日常ではよくつかわれるバラの香りのする化粧水である。ローズウォーターのひんやりした液体を顔や手に吹きかけてもらおうと周りにほのかにバラの香りが漂い心地よい。ローズウォーターは匂いだけでなく消毒効果もあるそうだ。

バラのいい香りが辺りに漂い緊張がゆるむのだろうか、噴霧されると皆さん笑顔になる。

コロナ禍以来、日本ではアルコール消毒が定着したが、モロッコのローズウォーターはさわやかな香り、そして残り香を漂わせ気持ちが和らぐ。一方のアルコールは誠に即物的で、どうも色艶がない代物

に感じてしまう。

バラの種類は多いが、強い香りを持つバラは”ダマスクス“という品種だ。香水の原料としてのバラの原液はブルガリアが一手に世界に供給している。ブルガリアではお茶やジャム等にも加工されていたがモロッコでは目にすることはなかった。

「タンネリ」

迷宮都市フェズのタンネリは一見の価値がある。タンネリの見学では職人が壺の中に入り、染料をなめし皮に摺り込み、きれいに染め上げていく過程を見ることが出来る。

建屋の3階のテラスから下を覗くと、目の下に広がる光景を一望できる。見た瞬間「これは凄い！なん



皮の皮をなめし染めている職人たち

だろう？」と誰しも身を乗り出し凝視する。壺の中には皮を染める染料が入っていて皮と人間が壺の中で格闘している大変な重労働である。染料の入った色とりどりの壺は、およそ300個以上もあろうか壮観である。

迷路フェズを歩いていて、タンネリの近くに来ると芳しい匂いとは、とても言えない臭いが鼻孔をつき一様に顔をしかめる。

匂い消しにガイドから香りの強いミントの葉を手渡され、ようやく皮の匂いから解放

される。

出来上がった良質ななめし皮を使った商品の種類と数がこれまたすごい。建屋の各部屋には商品を天井まで積み上げ客の購買意欲を掻き立てている。物は市価に比べるとかなりお買い得だ。そして次第に何か買わねば損をしたような心地となっていく。人間の欲の皮のツッパリは相当なものだ。

全ての商品は正札ではなく、売り子とのネゴで価格が決まるので購入するには多少時間が必要だ。交渉次第では言い値の半額以下で立派な皮の商品が手に入る。

バブーシュ（皮のスリッパ風履物）は手ごろな価格で人気が高い。街中のスーク（市場）をぶらついてみると履物屋の数の多さに気が付く。とりわけバブーシュ専門の店は良く目にする。モロッコの人には室内履きのみならず外歩きにも使用している人がいる。

日本でも履物屋はよく見かけるが、店先に陳列されている商品の種類はモロッコとは異なる。私たちが日常履くビジネスシューズやハイヒールは彼の地では目にしたことはない。

「ハッターラ」

モロッコでは水は貴重な資源である。中国奥地や中東の乾燥の激しい砂漠や土漠地帯には“カレーズ”または“カナート”とよんでいる地下用水路が張り巡らされている。

水を乾燥地帯に送るため地面に縦穴を掘り、水の蒸発を防ぐため地下深く用水路を通し、水のないところへ水を運ぶシステムである。このメンテナンスは大変である。

一定間隔に縦穴があり人間はこの縦穴から底へ降りて定期的に水路の掃除や手入れをするのである。モロッコの乾燥地帯では今も地下水路に頼りメンテナンスを続けているところがあった。モロッコでは地下用水路を「ハッターラ」と呼んでいる。



ハッターラ（地下用水路）への地表入り



人工池 荒れ地を沃野に

モロッコは日本などの援助で灌漑用水池を作り荒れ地を耕作地に変えている。

ところで日本では大地は緑に覆われているのが当たり前である。モロッコはアトラス山脈を超え、地中海側とは反対側へやってくると風景が一変し、乾燥地帯となり雑草と言えども緑を目にすることが少なく、赤土の殺風景な風景が延々と続く。

時に緑を目にすることがある。ナツメヤシや小さな畑などがあって目に眩しい。無味乾燥の赤茶けた風景に飽き飽きしていた時に目にするオアシスの緑はハッとするほど美しい。

イスラエルやヨルダンの干からびた荒涼とした地を見続け日本に帰国すると、見慣れた変哲もない緑に覆われた大地に感動してしまうあの感覚である。

「モスク」

モロッコはイスラム教の国である。イスラムというとテロを連想し怖いという観念を持つ人がいるがモロッコ国民は、ゆったりしていて穏やかで親切である。

イスラム教の祈りの場は高いミナレットを備えたモスクである。モロッコ最大のモスクはカサブランカにある前国王の名を冠した”ハッサン2世モスク”である。

収容人数は2.5万人で、先ごろまで210mのミナレットは世界でもっとも高かった。

因みにキリスト教最大の寺院はバチカンにあるカソリックの総本山サン・ピエトロ大聖堂で6万人を収容できる。日本は東本願寺で3000名収容である。

「ロバ」



出番を待つロバたち

日本では今やロバは動物園以外では通常みることも無くなってしまった。彼の地では今もロバは現役である。

大都市の車の多いところでも物を運搬しているし、旧市街の狭い通りや地方に行くとロバを頻繁に見かける。ゆったりしたのどかな風景にロバは良く溶け込んでいる。

「飲み屋街」

日本のどこにでもある飲み屋街はモロッコでは見当たらない。イスラム教の教義に従えば無くて当たり前のことなのだろうが、新宿渋谷池袋を毎度うろつきまわる飲んべいの友人にとってはネオンの瞬く飲み屋街が恋しかったに違いない。ぶつぶつ文句を言っていた。モロッコの人は、人間関係の構築やストレス解消はどこでどうしているのだろうか。

「コンビニ」

コンビニがないことに気が付いた。全く見かけないのである。もっとも日本のコンビニの歴史もそう古くない。1970年前半ごろから見かけるようになったと記憶している。

今や日本ではコンビニの便利さは日常生活に欠かすことのできないものの一つになってしまった。余談だが世界一のコンビニ大国は隣国の韓国と耳にしたことがある。

「ヘナ」

ヘナはミソハギという植物の葉からとれる染料で、古来5千年も前に白髪染などに利用されている。モロッコでは魔よけになると信じられ手足に模様を施している人を時々見かける。



ヘナで腕に模様を入れた妊婦

精緻な模様を手足に書いてもらうが、見たところ刺青を入れたように見える。

ヘナでつづった文様は1週間から3週間で自然に消えるそう。ヘナは日本では髪や頭皮に優しい天然染料として商品化されている。

日本モロッコ協会のイベント「モロッコの夕べ」のアトラクションにヘナで模様を描くサービスをしたことがあったが人気はとても高かった。

旧市街にある喧騒の通りを無目的に冷やかしながら歩くのは

楽しく、つい時間が経つのを忘れてしまう。既存の知識や習慣で物を見ているとモロッコでは理解できない代物に出会い新しい発見がある。

「ハーブ店」

ハーブ売りもその一つだ。店先に山と積んだ草の山を一体何を商っているのか説明を聞くまで判らなかった。立ち止まって見ていると、草をひとつかみ手渡され匂いを嗅いでみると手ぶりする。草はミントのいい香りがした。ミントティーに使うミントを売っている店であることがようやく判った。日本ではこんな商売見たことがない。

「魔よけ」

日本では普通人様の家を訪ねるときには、インターホーンで来意を告げる。モロッコではインターホーンは見かけないがドアにはいろいろなノッカーが備わっている。魔よけの意味があるのかファティマの手型のノッカーをしばしば見かける。トルコの魔よけは、青いガラスの眼玉（正式名はナザールボンジュウ）でどこにでも売っていた。わが家には青い目玉もファイティマの手もあるが空き巣に入られてしまった。魔よけとは何ぞや！

「水売り」

水売りはモロッコ以外では見た記憶がない。マラケシュのジャマエルフナ広場で見かけたただけだがほんとに今も水を売っているのか確かめたわけではないが、彼らは大きなメキシカンハットのようなつば広の派手な帽子をかぶり、赤い衣装を身に纏い動物の皮袋に水を入れて売っているようだ。目立つし、もの珍しい光景なのでカメラを向けるとモデル料をしつこく請求される。



ファティマの手



ハーブ屋の店先



水売り

「サボテンの実」

サボテンは日本でも観賞用に見かけることが間々ある。マラケシュのマジョレル庭園には世界中から集めた様々な種類のサボテンが展示されていて思わず見入ってしまう。

モロッコでは、棘だらけのウチワサボテンを塀代わりに家の周りにびっしり植えているのを目にした。

またウチワサボテンの鋭いとげをそぎ落とし野菜として店先に並べている。

ウチワサボテンの葉先には鶏卵大の大きさの実がなるが、これを売人がナイフで棘をそぎ落とし果肉を売っている。みずみずしく少し甘みがあり盛夏には甘露甘露となる。



ウチワサボテンの実は夏の風物



ドラゴンフルーツと果肉

近年日本でも見かけるがベトナムやタイなどでは、ソフトボール大の“ドラゴンフルーツ”をよく見る。赤っぽい皮の中は真っ白な果肉で黒ゴマのような小さな種があり、初めてテーブルにデザートとして出てきた時には、ゴマ塩のむすびと勘違いしたことがある。味は淡白でそう美味い物ではないと思っているが、ドラゴンフルーツもサボテンの果肉である。

「本屋」

日本でも一昔前に比べると本屋が激減している。6月7日の読売新聞の一面見出しに全国の本屋の数がついに1万軒を切ったと大きく報じている。

モロッコで本屋らしき本屋を見たのはたった1軒であった。まさかモロッコの人には本を読まないなどとは思わないが観光客がうろつくような場には本屋は見当たらなかった。



一軒だけ見かけた本屋

「民族衣装」



民族衣装をまとった女性たちのスナップ



駐日大使の正装

モロッコでは都会でも地方でも民族衣装のジュラバやカフタンをまとっている人がそぞろ歩きしている。若い人はジーンズやTシャツだ。地方へ行くと民族衣装をまとっている人が普通であるし、特に年配の女性のほとんどは民族衣装を身に着けている。

日本も一昔前には年配者は着物姿が普通であった。モロッコの伝統衣装のそぞろ歩きを見ながら過ぎ去りし日本に郷愁を覚えた。

この他洋菓子店、喫茶店、和食堂、和食材屋、文房具屋、ラーメン屋、家電量販店等、日本人が日常生活で見慣れている店は彼の地では目に止まらなかった。スーパーマーケットもフランス資本のカルフールを一度マラケシュで目にしただけである。ところ変われば品変わるである。モロッコの旅は物珍しく退屈を感じさせない旅路である。